教科でキャリア教育

▼東桜学館中学校・高校（山形・県立）

第46回 国語

今号の先生

国語
延沢恵理子（のべさわ）先生

大学卒業後、山形県で高校教師に。本記事でふれる国語の指導のほか、長年、進路指導にも注力してきた。「全国女性進路指導研究会」「山形若手・中堅進学指導研究会」の立ち上げメンバー。学生時代からあこがれた故・大村はま氏は生前、毎年山形に来訪。同氏に若い頃学んだことが現在のベースとなっている。

「共通言語の獲得」と「自己破壊」を重ね 他者とつながって今の自分を超えていく

読むための枠組みをもって生徒が評論と向き合う

山形県立東桜学館中学校・高校の延沢恵理子先生は、生徒が「評論」にふれるにあたり、筆者の意図を汲むきっかけとなる汎用的な枠組みを伝授している。例えば、「対比・相違点・共通点」などだ。

1学期終盤の国語の授業。同校の1年生は、教科書に載る評論「時間と自由の関係について」を読み込むことに挑んだ。昔の学校には時計がなく、時計に支配されていなかった、という話から始まる評論だ。

まずは個々に黙読。そのあとで延沢先生がワークシートを配って投げかけた。

「筆者の意図を考えてみようと思います。この文章からわかることはこういうことかな？という点を書き出してみましょう」

シートに記載されていたのは、評論の本文から抜き出した次の2つの文章。

問A「時間について話をするなら『時間を有効に使いなさい』ではなくて、『時間を有効につくりなさい』でなければ、ならなかった。」

問B「長い時間が一瞬のうちに過ぎ去ったり、逆に僅かな時間を過ごすために、あきあきするほどの『長い時間』が必要だったり。時計のうえでは長い時間が経過したのに何も残らない時間があったり、ほんの僅かな時間が自分を変えてしまうほどの大きさを持っていたり。」

この文章から読み取れることを、各自が5分間で記述。次いで隣同士で2分間議論。さらに延沢先生と生徒で言葉のキャッチボールをし、出てきた意見を黒板に書き出し、全体で共有した。例えばある男子生徒は問Aをこう読み解いた。

「自分たちが当たり前に使っている言葉は『時間を有効に使え』だけど、筆者はその一般論を否定していて、『有効につくる』ことが大事だと考えている」

発言を引き取って延沢先生が続ける。

「そう、評論には基本、一般論と筆者の考えの『対比』構造があるんだったよね。その対比を見つけるヒントになるのが、互いに食い違う部分のある『相違点』。この文章では、時間を使う／時間をつくる、という相違点が出てくるわけだけれど、じゃあこの2つはどう違うの？」

話をふられた女子生徒が、頭の中から言葉を引っ張りだすようにして返答した

「時間を使うは…時間がもうそこにあって、それを使わせてもらう。時間をつくるは…自分が時間を支配するみたいな？」

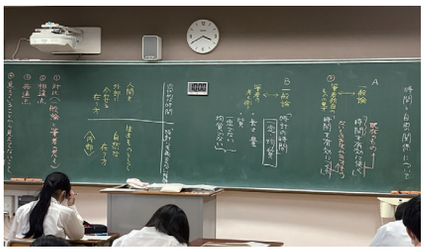
延沢先生が応答する。

「そうね。時間を使うは『すでにあるものを使う』。時間をつくるは『ないものを生み出す』感じがあるんじゃないかな」

筆者の考えにふれながらものの見方や考え方を磨く

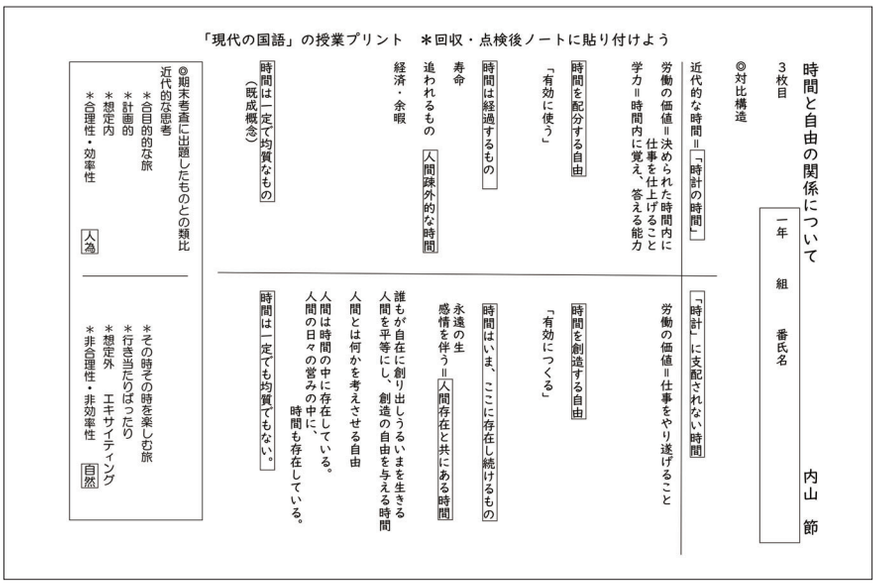
時間を使う／つくるの違いを明確にするために、問Bの文章からは何が読み取れるかも探った。男子生徒が「～たり、～たり、とあるから具体例っぽい」と口にし、そこから「時間をつくることに関わる例のようだ」という話に。ならば「その例の『共通点』は何？」と延沢先生。

取材・文／松井大助　撮影／川島啓司



生徒と対話しながら要点をまとめた黒板。皆で考えたことが眼前に立ち現れるチョーク&トークの凄みを感じる。

生徒が未知の領域の文章と真剣に向き合う機会を生み出せる、というのも、国語の授業ならではの魅力。



「現代の国語」の授業プリント　＊回収・点検後ノートに貼り付けよう

時間と自由の関係について　内山　節

3枚目　一年　組　番氏名

◎対比構造

近代的な時間＝「時計の時間」

労働の価値＝決められた時間内に仕事を仕上げること

学力＝時間内に覚え、答える能力

時間を配分する自由

「有効に使う」

時間は経過するもの

寿命

追われるもの　人間疎外的な時間

経済・余暇

「時計」に支配されない時間

労働の価値＝仕事をやり遂げること

時間を創造する自由

「有効につくる」

時間はいま、ここに存在し続けるもの

永遠の生

感情を伴う＝人間存在と共にある時間

誰もが自在に創り出しうるいまを生きる

人間を平等にし、創造の自由を与える時間

人間とは何かを考えさせる自由

人間は時間の中に存在している。

人間の日々の営みの中に、時間も存在している。

時間は一定でも均質でもない。

時間は一定で均質なもの

（既成概念）

◎期末考査に出題したものとの類比

近代的な思考

＊合目的的な旅

＊計画的

＊想定内

＊合理性・効率性　人為

＊その時その時を楽しむ旅

＊行き当たりばったり

＊想定外　エキサイティング

＊非合理性・非効率性　自然

女子生徒が、延沢先生と対話しながら徐々に見えてきたものを言葉にした。

「後半は…何を体験したかで時間の価値は変わる、という例のように思います」

「そうだね。時間の価値とか、質の話をしているね。では前半の例は？」

「…量？ 時間の量や長さも、その人の感じ方で変わるという例？」

延沢先生はやり取りした要点を黒板に書きながら、ここまでの流れを総括した。

「一般的には時間といえば、時計の時間がそうであるように『一定で均質なもの』ですよね。それに対して、筆者の論じる時間は『一定でも均質でもないもの』ということが見えてきたんじゃないかな」

続いて2枚目のワークシートを生徒たちに配り、延沢先生が改めて呼びかけた。

「筆者の考えがつかめてきたと思うので、次の問いの回答を言語化してみましょう」

シートに記されていたのは複数の設問。

問1 評論に出てくる「外部化された時間」とは何か。問2 時間はつくるものと筆者が考えるのはなぜか。生徒たちはここまでに話題にあがった言葉も生かして、自分の考えをまとめ、回答を記述した。

さらに延沢先生は3枚目のシートを配付（上の画像参照）。評論全体を対比構造で整理し、期末考査で出題した別の評論との類比にもふれたものだ。「上段と下段はどんなグループだと思う？」と問うと、生徒から「上は外部化、下は内部化」という意見が。それを受けて延沢先生は「上は『人間を外部に合わせるあり方』で、下は『生き物として自然なあり方』と言えるかもね」と言い足してこう締めくくった。

「教科書には『人間存在と共にある時間』としか書いていないが、その対比を探れば『人間疎外的な時間』が見えてくるよ」

何のためにどうやって他者とつながるのか

国語の授業を通して、延沢先生が目指していることは、一つは「汎用性のある読解力」を育むことだ。

「教材で扱う文章を読み込んで終わり、という授業ではなく、その学習のなかで、ほかの文章にも応用できる読む力を養いたいのです。評論を読むなら対比・相違点・共通点を意識するなど、まずは読むときの『型』を身につけ、そのうえで自分なりの『観方』を磨くというか。国語が得意な生徒だけでなく、苦手な生徒のなかにも、文章を深く読むためのトリガーをつくることができたら、と思っています」

また、生徒が「共通言語」を獲得することも、国語学習の最重要課題に置いている。共通言語とは、学問の世界をはじめ、社会のなかで互いが同じ認識をもって用いる言葉のこと。生徒がそのレベルで言葉を使いこなせるよう、延沢先生は授業で扱う文章からキーワードを抜き出しては、どんな意味をもつかを生徒に言語化させ、「言葉を耕す」ことをしているのだ。

「共通言語を身につけていないと、この先、学問や仕事のために本や資料を読んでも筆者の意図を正確に汲み取れません。そこが課題であるのに、今は自分の好みに合うものをAIが勧めてくる時代なので、読書好きの生徒でも、せまい世界しか知らず、趣味の圏外の言葉は、まわりとの認識のすり合わせのない『個人内言語』に留まっています。国語の授業では、教科書の教材を中心に、知らない領域の文章を生徒に読ませることができます。探究的な学びで『生徒のやりたいことに寄り添う』ことも大事ですが、一方で強制的に『未知の世界に出会わせる』というのも、教員の大切な使命だと思うんですよ」

授業のなかで「他者」と真剣に向き合う機会をつくり、生徒の価値観を揺さぶることもねらっているという。

「価値観が一つになるのは危うい、と感じているからです。例えば本校の生徒は、進学に向けて勉強をがんばっていて、教員もそれを応援しています。が、『目的を定めて時間を有効に使おう』という価値観に完全に染まると、本人がその方向から外れたときに自分を認められなくなって苦しんだり、あるいは違う生き方をする人を簡単に見下したりします。かといって『自由に楽しめばいい』という価値観に安易に流れると、自己鍛錬できる貴重な学生時代を無下にします。だからこそ、隣にいる仲間から、文章を介して出会った筆者まで、さまざまな『他者』と向き合って多様な価値観にふれて、自分の見方や考え方を絶えず更新して前に進んでほしいのです。読解力を高め、共通言語を身につけ、言葉を通して他者とつながることで、自分にはなかったものを知って成長する。他人とつながってその先に行く力を、国語の授業で育むことができたらと思っています」

板書をするとき以外は、基本、教壇に上がらず、生徒と同じ立ち位置からやり取りすることを、初任の時からずっと続けている。

問いに取り組む生徒。現在の延沢先生の授業は、まずは個々でじっくり思考し、そのうえで対話するのが基本だ。

授業ができるまで

主体的・対話的ではあるが深い学びではなかった授業

延沢先生は、中学時代に信頼できる先生と出会えたことを機に、教師を志したという。大学の卒論では、国語教師であり教育研究者でもある大村はま氏を研究。彼女のように「一人ひとりと向き合う教育をしたい」と理想を抱いて教師になった。そして初任校から、生徒が活発に発言する授業を実践した。今風に言えば「主体的で対話的な授業」であり、先進的だ。

だが当の本人は、授業を重ねるなかで「自分の未熟と欺瞞」を感じていく。

「授業は盛り上がるのですが、テストをすると生徒が思いのほか答えを書けなかったのです。楽しく話しているが、学びは深まっていない。これで力がつくのか。そもそも国語の力をつけるとはどういうことか。私はそこがまだ見えていないと痛感したのです。20代から30代にかけては、もがき続ける日々になりました」

研修や勉強会に参加し、国語という教科をもっと知ろうとした。教員2年目に、仲間と国語学習の研究会も立ち上げた。

そうした模索を続けていた最中に、自身にとって国語や教育のことをより切実に考えざるを得なくなる出来事を体験した。2011年の東日本大震災だ。

心に残るものを伝えようと体当たりで学び続けて

延沢先生は宮城県の海沿いの地域出身。津波が押し寄せた大震災で、幼いころからの思い出の場所を数多く失った。被災後、その地元に勤務地の山形からなんとか戻った時は、破壊された土地と憔悴した家族や友人知人の姿にただただ涙した。ぬぐい去れない喪失感。その時に、変わり果てた景色を見ながら「なくならないものって何だろう」と考えたという。

「なくならないものは、人の心に残したものだけなのではないか。自分は生徒たちの心に残せるものをもっているのか。そんな問いが浮かんだのです。高校で私がやってきたことは国語の教科指導と進路指導。ここをもっと鍛えて、生徒の心に残るものを伝えていきたい、と思いました」

国語の研究会では「作問」に注力するようになった。進学校に勤務した時、入試問題を大量に解くことを経験し、「思考するに足る問い」があると学びが深まると感じたからだ。山形県最上地域の小中高大の国語の先生たちと、共に学び合う会も立ち上げた。

2015年に高大接続改革プランが策定されると、今後の教育の行方を見定めようと、地元大学の入試センターから文部科学省にまで直接話を聞きにいった。「PBL（課題解決学習）」や「個別最適化」という概念にも出会い、外部の講座やオンラインセミナーに参加して自ら学び、国語の授業で試してみた。その実践を通して「生徒が『独自性』を発揮できるよう寄り添うことと、『共通性』を獲得できるよう指導することの両方が大事ではないか」との思いを深めていった。

さらに2017年からは中高一貫校の現任校で、中学1年生が高校3年生になるまで、6年間持ち上がりで国語を教える機会に恵まれた。発達段階の違いを身をもって知り、例えば高校生になると、中学では難しかった「抽象度の高い思考」も段々とできるようになることを体感した。だからこそ、「社会に出る手前の高校教育の役割」として、高校の国語の授業では、生徒が少し背伸びをしながら抽象的なことを考える時間も大切にした。

同僚の先生INTERVIEW

段階を踏みながら問う力も伸ばしたい

中高一貫の本校で、高校籍の教員で初めて中学生を指導したのが延沢先生で、そのあとで私も中学生を3年間担当しました。中高の両方を経験して良かったと思うのは、6年間の学習の体系的なつながりを実感できたことです。語彙力も読む力も、段階を踏んで深めていくのだな、と。今は高校生の指導に戻り、延沢先生と一緒に教材の切り口などを考えています。理想としては、卒業までに、生徒が「自分で問いを立てて文章を読む」ところまでもっていけたらと思っています。

国語科
吉田 元先生

文法という基礎を教えることも大切

延沢先生と吉田先生に続き、高校籍の教員として、現在、中学生に国語を教えています。中学1年生の国語の授業では「口語文法」を教える機会があり、以降の「古典文法」の指導にも生かせるメリットを感じており、自分の勉強にもなっています。延沢先生からは「頭の柔らかい中学生のうちに語彙をしみ込ませると読む力が高まるよ」とお聞きしており、語彙も意識して指導中です。中高のどの時期にどんな力が身につくとよいか、私も模索していきたいと思っています。

国語科
山口 優先生

東桜学館中学校・高校（山形・県立）

School Data

創立2016年／普通科　生徒数576名（男子286人／女子290人）
進路状況（2023年3月卒業）大学132人、短大2人、専門学校等24人、就職3人、進学準備ほか11人

Outline

山形県内初の併設型中高一貫教育校。基本理念は「高い志」「創造的知性」「豊かな人間性」。「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」指定校として「グローカルな視点を持った科学技術人材の育成」にも取り組む。

生徒はこう変わる

怖くもある自己破壊に仲間と一緒に飛び込んでいく

延沢先生は授業を受けてきた生徒から、こんなことを問われたことがある。

「現代文の授業って、今まで当たり前だと思っていたことをぶっ壊してくる感じで。先生はやっていて怖くないの？」

その受け止め方は延沢先生にとって嬉しいことだった。「学びはある種の自己破壊で、怖いもの」と自身も思っているからだ。だからこう返した。

「学ぶって多分そういう行為なのでは？当たり前が壊れると、たしかに痛かったり不安になったりするけれど、その先でまた新しいものに出会えるのが面白い、と私は思う。『自己破壊』と『未知との出会い』を天秤にかけた時、『怖いけど飛び込んでみたい』と思えるといいね。一人では怯んでしまうことも、少なくともこの学校で学んでいるあいだは、一緒に飛び込んでくれる仲間がいるんだから」

生徒たちが卒業までに、教員に自分の考えをぶつけられるようになる――いわば「議論できる人」になることも望んできた。それだけに、6年間教えた生徒たちの進路相談にのった時、こちらの提案や指摘に「いや、私はこう考えているんです」とガツンと反論された時は、思わず相好を崩してしまったそうだ。

「反論されて喜ぶなんてアヤシイけれど（笑）、ニヤニヤしちゃいますよね」

何よりもうれしいのは、生徒が習ったことを「覚えている」のではなく「自分の言葉として使ったとき」だと延沢先生は語る。例えばコロナ禍で、生徒たちのメンタルへの影響が心配されてアンケート調査を行った時、その質問紙で鶴を折って提出した生徒がいた。中を開けると、そこには手書きでこう記されていた。

「この文章を読んでいるということは、折り紙を壊して中身を見たということ。僕たちはそうやって、痛みを伴いながら新しいものを得てきたはずです」

授業で伝えてきたことを咀嚼した、まぎれもなく彼自身の言葉であり、延沢先生は胸が熱くなったという。

「生徒たちには『方丈記』の一節を引き合いに出して話をすることもあります。『ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず』。流れているものは腐らない、と。これからも生徒と一緒に自己破壊を繰り返しながら、私自身も学び続けたいと思っています」

卒業生INTERVIEW

自分で思考するとはどういうことかを的確に教えてくれた

東北大学
今野和香さん

延沢先生には6年間、国語を教わりました。よく覚えているのは、小説を読んだあとで「私はこう思う」と言った生徒の考えに先生が応える形でしか解説を受けられない授業です。中学生の時で、そんな授業は初めてだったのでびっくりしました。学びとは与えられるものではなく、取りに行くものだ、と教わったというか。「わからないことがあれば自分の言葉で投げかけにきなさい」とも言われていたので、次第にみんな、先生に質問をしにいくようになりました。「私はこう思ったんですけれど」って。お世辞で褒めることはしない先生。でも私たちが自分で考えてがんばったことは、いつも本気で応援してくれました。

思考の仕方も教わりました。例えば、全体像がつかめないときは細かく分割して考えてみる。1本の物差しを置いて、その物差しに対して当てはまるか当てはまらないかで考えてみる。そうした頭の使い方は、大学受験から今の大学での勉強、そして普段の生活で課題にぶつかったときの対策まで、幅広く生かせるものだった、と今感じています。

一緒に学ぶ仲間がいる。その環境下で成しえる「学校だからこその学び」がある、と延沢先生は考えている。

授業作りのポイント

読むときの型から学ぶことで、国語が苦手な生徒でも、文章を深く読めるようになってもらいたいです。知らない領域の文章と向き合わせ、他者とつながるための共通言語の獲得を促したいと思っています。自分を壊して新しいものを得るという、痛みや怖さを伴う学びに仲間と一緒に飛び込んでほしいです。

\ Point.1 /

読むときの型を教える

評論の対比のほか、文章の展開には「期待されている何かがある→想定に反することが起きる→驚く／落胆する」という流れが多いことも伝えている。延沢先生はこの展開を「びっくり問題」「がっかり問題」と呼んでいる。

\ Point.2 /

ハッとする体験で読む以前を耕す

例えば、物事を知らないと読解が変わってしまう体験をさせて、知識を軽視しないように促している。また、作品が書かれた時代に立って文章を読まないと読み違える例を指摘して、「読む以前」を耕している。

\ Point.3 /

入試問題から時代を見つめる

延沢先生は入試問題の分析も大事にしている。受験対策となるほか、どんなテーマで何を問うたかに着目すると「大学の先生方の今の問題意識が見えてくる」からだ。そこで感じた時代の変化を生徒とも共有していくという。

\ Point.4 /

寄り添う以外に壁にもなる

生徒の考えを否定せず伸ばすことが大事な場面もあれば、他者とつながるための共通項を生徒が学べるよう促すことが重要な場面もある。だから、生徒の「思考の壁」になることも教師の仕事だ、と延沢先生は思っている。